

## 子どもの本にみる文化的スクリプト

### －児童書の日米比較研究－

東京女子大学大学院 風 間 みどり  
東京女子大学 唐 澤 真 弓

## Cultural Scripts in Japanese and American Children's books - A Comparative Study of Cultural Practices -

Tokyo Woman's Christian University, graduate program KAZAMA Midori  
Tokyo Woman's Christian University KARASAWA Mayumi

本研究では、日米の文化的スクリプトを比較するために、日米の児童書各 40 冊を対象に対処行動についての内容分析を行った。日本では、主人公が周囲の状況や他者の言動を、自分の行動を阻止する方向であっても受け入れていく行動が多く描かれていたのに対し、アメリカでは、自らのコントロールによる行動が多く見られている。日本の児童書では、他者や状況といった外的要因に合わせて行動する、適応型対処行動スクリプトがアメリカに比べ多く見出されたのに対して、アメリカの児童書では、自分の意思を強く持つコントロール型対処行動のスクリプトが多く見出された。これらは、従来の教科書分析の結果と一致しており、子どもが自発的に選択する児童書の中にも、文化的スクリプトが見出されたことを示す。文化的スクリプトは、送り手と受け手の関係が明確な親や家族とのコミュニケーション、学校での潜在的カリキュラムだけでなく、社会にある情報源、メディアとしての児童書のなかにも見出されることが明らかにされた。

**【キーワード】 児童書, 日米比較, 対処行動, 文化的スクリプト**

In this study, we examined 40 Japanese children's books and American children's books to find cultural scripts of coping style. There were significant differences between Japanese and American books about coping style. Especially external factors, such as other persons and situations are significantly different. Main characters in Japanese children's books were described as adjustment-to-external situation while American were described as control-to-external situation. Moreover, Japanese main characters accepted negative matters and others opposite opinions to them. On the other hand, main characters in American books had more influence or control on their surroundings than in Japanese.

**【Key words】 Children's books, Cross-cultural differences, Coping behaviors, Cultural scripts.**

## はじめに

子どもは、自分を取り巻く社会や文化の中で規定された、規範・思考様式・行動様式・大人のもつ発達期待といった文化にあるパターンを学習していく。東(1997)は、このパターンを文化的スクリプトとし、物語の構成や生成の枠組には文化的スクリプトが必然的に存在するとしている。こうしたスクリプトは、受け手と送り手の住む社会や文化の日常生活の中にあり、受け手である子どもは、社会的経験を通じてそれを獲得していくと考えられている。人間の発達とは、自分を取り巻く社会環境の中で、文化的スクリプトを自己の中に蓄積しながら成長発達していく(東, 1997;1999;2005)といえる。

こうした文化の中での自己の発達をとらえるには、対照的な文化・社会の文化的スクリプトを比較し、人間発達の多様性をとらえることが重要となってくる。例えば、東らは道徳的判断におけるスクリプトの文化間比較研究において、被験者自身に実際に物語を作ってもらおうという方法を用いた(東・唐澤, 1988; 真島・唐澤・Yeh・東, 1994; 1995)。その結果、日本では気持ちに言及する物語の展開が多いのに対し、米国では、事実即した因果関係を求める展開が多く見られ、物語の枠組となるスクリプトが日米で異なっていることが明らかとなった。このことは、文化によって子どもの獲得するスクリプトが異なることを示し、気持ち主義による関係志向性と客観性・論理性を重視した自己志向性がそれぞれ関連していることが示唆されたといえよう。

文化的スクリプトは、人の表象にあると同時に学校での教育方法・家庭でのしつけや対人コミュニケーション、メディアの内容にも存在することが従来の研究で明らかにされてきている。例えば、小学校での歴史授業の比較研究では、日本の教師は生徒に対し、時系列的な歴史的理解を促し、歴史的出来事に対してクラスの共通理解を求めるのに対し、アメリカでは、教師は生徒に対し歴史的出来事を因果関係を重視して理解を求める(渡辺, 2004)ことが明らかにされた。たとえ同じ歴史事実であっても、求められる理解の仕方が異なれば、生徒達が学ぶスクリプトも異なってくる。学ぶ材料となる教科書にもそのことは表われる。日米の教科書比較研究では、ストーリーのテーマに違いがみられている(今井, 1990)。日本では、暖かい人間関係を扱ったテーマが多く、アメリカでは自我の確立や自立心を扱ったテーマが多かったのである。また、周囲の状況や他者に対し主人公がとる対処行動に注目した日英の教科書比較研究では、英国の教科書ではプライマリーコントロール(Weisz, Rothbaum, Blackburn, 1984)に対応する対処行動が優勢で、日本の教科書ではセカンダリーコントロールに対応する行動が優勢であることが示されている(塘・真島・野本, 1998)。

本研究では、これまでの研究で指摘されてきた日本の文化的スクリプトが日常生活にある児童書においても見出せるかどうかを目的とした。学校教育に使用される教科書だけでなく、日常的で自主的選択が可能である児童書にも、先行研究と同様の傾向が見られるかどうかを検討したものである。方法としては、塘ら(1998)の教科書比較研究と同様のコーディングによる内容分析を用いた。加えて、Morling, Kitayama & Miyamoto(2002)が用いた「影響」と「適応」についても分析の対象とした。Morlingらは、相互独立的自己観が優勢な米国では、周囲への影響といったプライマリーコントロールと近似した対処行動が強調され、相互協調的自己観が優勢な日本では、セカンダリーコントロールに近似し

た環境への適応が強調されることを明らかにした。この傾向は、児童書の中の主人公の対処行動においても同様で、米国の作品では「影響」が強調され、日本の作品では「適応」が強調されると予測される。さらに、日米の小学校の歴史授業を比較し、表現スタイルの違いを研究した渡辺（2004）は、米国人は因果関係を重視し、日本人は時系列を重視して歴史を語ることを明らかにしていることから、本研究では、日米の物語の完結スタイルに違いがあるかどうかとも検討した。具体的には、主人公の対処行動後に主人公の意思や主張、感情が物語に記述され、論理的に納得した形で終えているのか、主人公の意志には触れず、想像の余地や余韻をもたせる形で終えるのかを比較した。米国の児童書では、主人公の行動の理由づけをはっきり記述した因果律構造型が多く見られ、日本の児童書は、出来事とその結果の対処行動の記述という時系列連鎖型が多く見られると予測した。

## 方 法

分析対象とした日米の児童書は、それぞれの国の図書協会が出している推薦図書リスト（2001年～2004年）から、昔話や伝記、翻訳本、図鑑などを除外して、日本 39 冊、米国 40 冊の児童書を選択した。米国は、American Library Association (ALA) が毎年出している Notable Children's Books のうち、younger reader 向けリスト及び middle reader 向けリストから、日本は、全国学校図書協会が毎年出している読書感想文課題図書及び夏休みの本（夏休み向けの推薦本）のうち、低学年（小学校 1, 2 年生）及び中学年（小学校 3, 4 年生）向けリストから抽出した。図書協会の推薦であるという点で 2 つのリストは同定できると考える。

分析方法は、塘ら（1998 ; 2000）のコーディングを参考とした。主人公として、作品中で最も多く登場した人物、動物や物体を対象とした。主人公について研究者が独立に選定したところ、その一致率は、日本・米国の児童書ともに 100%であった。すべての場面を対象とせず、1 作品の中で 2 場面を選定し、分析を行なった。1 つは、「主人公の最終的行動や意思に最も影響を与えたと考えられる事柄が起こる場面」である。児童書の中で主人公に影響を及ぼす外的要因への対処を分析することで、日米の子どもに対する社会の姿勢が検討できる。外的要因選定の 2 者間の評定一致率は、日本の児童書については 100%、米国の児童書については 83.3%であった。もう 1 つは、「外的要因」に対して、主人公がどのような対処行動をしているのかを描いている場面を取り上げ、主人公の「対処行動」について分析した。主人公の対処行動が、外的要因すなわち主人公に最も影響を及ぼすような周囲の状況や他者の言動に対して、それらを受け入れるのか、あるいは拒否するのかを取り上げた。受容方向と阻止方向の 2 種類に加え、阻止方向の外的要因を主人公が受け入れるか、拒否するのかについて検討した。主人公が自分の意見や主張を曲げて、周囲の状況や他者の言動を受け入れるのか、拒否するのかを分析することで、日米の児童書の主人公の対処行動の文化的スクリプトを精緻化できる。さらに、主人公の対処行動が周囲や他者に影響を与えるものであるかどうかについても分析した。この分析により、主人公の対処行動がコントロール型に近いのか、適応型に近いのかを考察することができる。対処行動の分析の項目に関する 2 者間の評定一致率の平均は、日本の児童書については 90%、米国の児童書については 100%であった。

最後に、物語の完結方法に関して、主人公の対処行動後の主人公の感情や意思、新たな行動に物語が触れているかどうかについて分析した。これは、渡辺（2004）の日米の思考表現スタイルの違いが児童書にも表れているかどうかを明らかにすることを目的としている。この点についての 2 者間の評定一致率は、日本：100%、米国：83.3%であった。

## 結 果

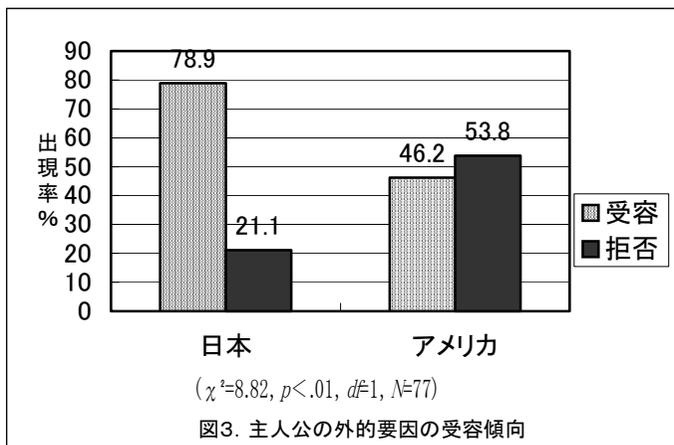
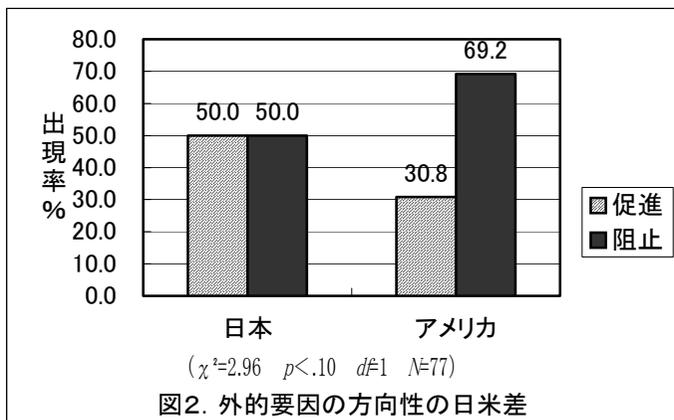
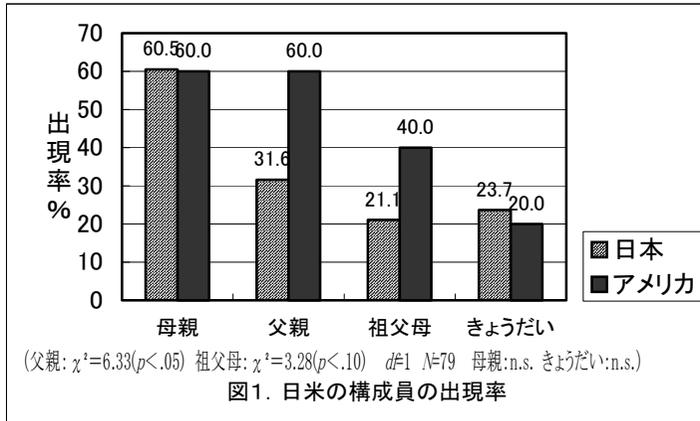
### 1. 日米の児童書の主人公の家庭環境

日米の児童書の主人公の家族構成について検討したところ、母親の出現率には日米間で差が見られず、日米ともほぼ 60%の物語に登場していた。一方、父親及び祖父母の出現率は日米で異なり、米国の児童書には日本の 2 倍以上の作品に父親・祖父母が多く登場していて、有意な差が見られた（父親： $\chi^2=6.33(p<.05)$  祖父母： $\chi^2=3.28(p<.10)$   $df=1$   $N=79$ , 図 1.)。特に、米国では、父親と母親が同割合で出現しており、家族の中で母親と父親の存在が同程度に重視されていると考えられる。日本では、人口問題研究所による第 2 回全国家庭動向調査結果（2003 年 3 月）によれば、育児の 80%以上を母親が担っている家族が約 8 割である。日本の児童書に父親の登場が少ないのは、日本における父親の育児参加の低さと関係すると考えられる（国立社会保障・人口問題研究所, 2000 ; U. S. Census Bureau, 2005)。日本の児童書に、実社会と同様に子どもと母親の関係性の強さが現れ、米国では、母親だけでなく父親も同じように、子どもと関わっていることを示していると考えられよう。

### 2. 日米の児童書における外的要因とそれに対する主人公の対処行動

外的要因とは、主人公に最も影響を及ぼしたと考えられる周囲の状況や他者の言動である。ここでは、外的要因が、主人公に対して、援助したり促進したりなど現状維持を認める方向（促進方向）と対立や阻止・拒絶という主人公の行動や考えと逆の方向の影響（阻止方向）について比較した（図 2）。日米の児童書間の差異には有意傾向が見られた（ $\chi^2=2.96$   $p<.10$   $df=1$   $N=77$ ）。日本は阻止方向と促進方向の間に差異がなかったが、米国の児童書では阻止方向が多く見られ、70%近くを占めている。

次に、外的要因に対する対処行動について、日本の児童書の主人公は、アメリカに比べて周囲の状況や他者の言動を受容する傾向があることが認められた（ $\chi^2=8.82$ ,  $p<.01$ ,  $df=1$ ,  $N=77$ , 図 3）。日本の児童書では、78.9%の主人公が周囲の状況や他者の言動を受け入れる一方、米国の主人公は、周囲の状況や他者の言動を 46.2%が受け入れ、53.8%が拒否する傾向が見られた。



さらに、自分に対して拒否したり反対する外的要因（阻止方向の外的要因）に対して、主人公がどのような対処行動をとるかを検討したところ、日米の児童書において、有意な差が見られた ( $\chi^2=5.10$ ,  $p<.05$ ,  $df=1$ ,  $N=46$ , 図4)。日本の児童書の主人公では、阻止方向外的要因を63.2%が受入れているのに対して、米国の児童書の主人公では29.6%しか受け入れていない。日本の児童書では、周囲の状

況や他者の意見が自分を援助するものはもちろんのこと、自分と対立するものであってもそれを受け入れて、適応していこうとする主人公の姿が、米国より多く描かれていると考えられる。

主人公が対処行動を示した後、外的要因が変化するかどうかを検討したところ、米国の児童書よりも日本の児童書では、外的要因を変化させることが少なく、日米の児童書で有意な差が認められた ( $\chi^2=3.90$ ,  $p<.05$ ,  $N=77$ , 図 5)。日本の児童書では、主人公の対処行動後にも外的要因の変化が 31.6%であったのに対し、米国の児童書では、53.8%が変化していた。米国の児童書には、周囲の状況や他者を変化させるような影響型の対処行動が、日本の児童書よりも多くは描かれていることがわかる。

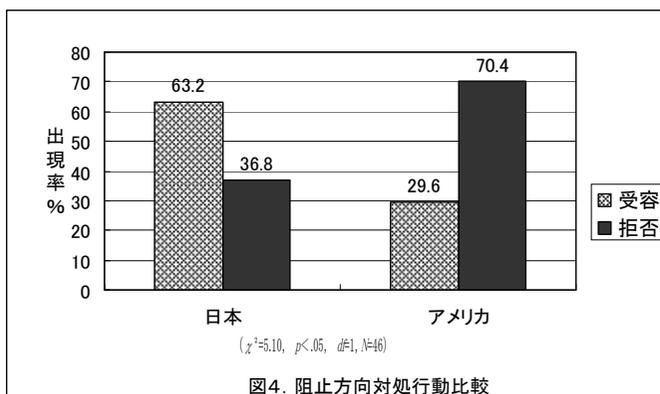


図4. 阻止方向対処行動比較

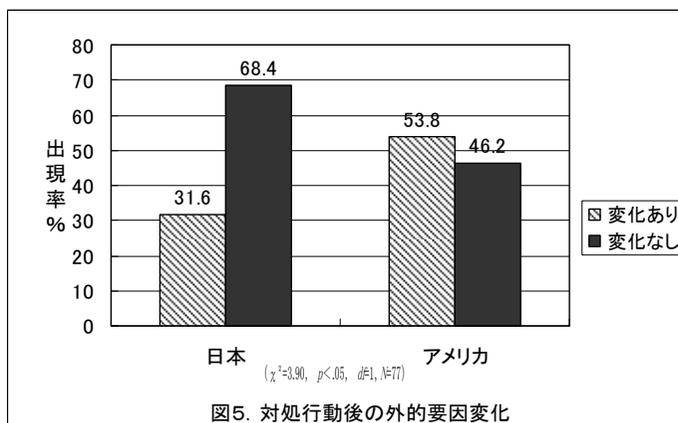
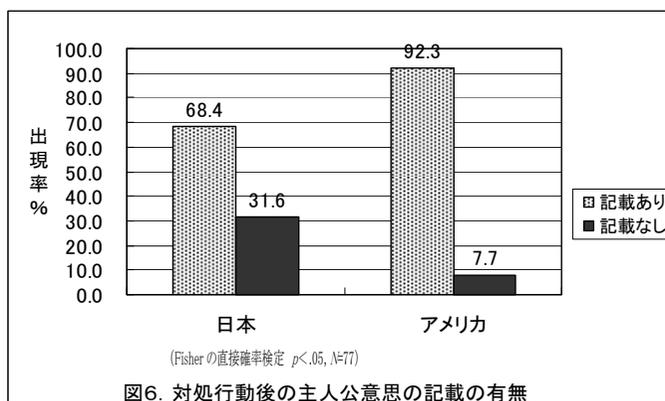


図5. 対処行動後の外的要因変化

以上の結果から、日本の児童書では、他者や周囲の状況に合わせて行動する適応型対処行動をとる主人公が多く描かれており、米国の児童書では、周囲に影響を及ぼし、自分でコントロールして行動をしていく主人公が多く描かれ、文化にある対処行動のスク립トが明らかにされたといえよう。このことは、Morlingらの研究結果(2002)とも一致する。子どもが自発的に選択することができる児童書の中にも、日米の対処行動の枠組みの相違が示されたといえよう。子どもは教科書のような目的の明確な読み物だけではなく、自分の好みによって選ぶような、児童書を通して自分が属する文化・社会に適した対処行動を学んでいくことになると考えられる。

### 3. 日米児童書における主人公の意思表示スタイル

主人公が、対処行動後に自分の意思・感情を表して物語を終えるのか、それとも、主人公の自己の意思や感情には触れないで物語を終了するのか、についても分析を行なった。その結果、日米ともに、対処行動後に自己の意思を確認した記述が多く見られたが、その割合には日米間で有意な差が見られた (Fisher の直接法  $p < .05$ ,  $N = 77$ , 図 6.)。米国では 92% 以上の児童書に自己の意思や感情の記述が見られたが、日本では 68.4% だった。つまり米国の児童書では、主人公が、自らの行動を振り返って自分の意見や気持ちを確認したり、今後の自分の希望や意見をはっきりさせて、物語が終わっていることが多いが、日本の児童書では、主人公が自分の意思をあいまいなままにして物語を終えることもかなり見られた。これは、米国人は、言動に対する理由や原因をはっきりさせる思考表現スタイル (渡辺, 2004) をとり、自己の主體的関与 (北山ら, 2000) を重視する一方、日本では他者との関係性の中に自己を位置づけ、あいまいな意思表示を行なうことと一致している。



## 考 察

以上の結果をまとめると、日米の児童書にみる文化的スクリプトの特徴として特に次の点が明らかになった。まず、物語の出現する家族メンバーは、父親・祖父母の出現率が米国の児童書で、日本より高かった。第2に、外的要因に対する主人公の対処行動については、日本の児童書の主人公は、米国の児童書の主人公よりも周囲の状況や他者の言動を受け入れる傾向が多く見られ、米国の児童書の主人公は、周囲の状況や他者に影響を及ぼす傾向が見られた。第3に、物語の終結に向けて、主人公の意思や思考の表現スタイルに関しては、米国の児童書の主人公が対処行動後に、主人公の意思や感情、これからの自分の進むべき方向性など、行動の理由付けや自己の意思を再確認して物語が多く、日本の児童書は、米国ほどその傾向が強くないことが明らかになった。

この点を具体的な記述から考察してみると、次のような特徴がみてとれる。

日本の児童書の『でこちゃん』は、「髪を予想外に短く切られてしまい、おでこが大きく見える姿にすっかり意気消沈している女の子に、姉がいちごの髪飾りをつけてあげることで、女の子はすっかり満足し、翌朝喜び勇んで元気に登園する」という物語では、姉の援助によって女の子の見方が変化

し、あまり好ましくなかったはずの現状に対して満足を得る姿が描かれている。一方、米国の『Ella sarah gets dressed』では、「主人公は、翌日の幼稚園に来ていく洋服を帽子から靴下まですべて選ぶのだが、あまりにも奇抜な組み合わせなので、家族中の皆に笑われ反対される。しかし、自分の意思を通し、自分で選んだ洋服を自信をもって着ることで、満足感に満ち喜んで登園する。」となっている。主人公は、自分の選択という個人的属性を大切に、満足を得ている。

ここで描かれた、日米の児童書における主人公に対する外的要因の設定の違いは以下のようにまとめられるだろう。

日本では、つらい状況→**他者からの援助**→満足・喜びにつながる行動となるのに対し、米国では、**自分と対立する意見**→（自己の意思）→満足・喜びにつながる行動となっている。

日本の児童書では、前髪を短く切られて、おでこが広すぎる顔になってしまい、登園するのがいやだなと思っているつらい状況に「姉がでこちゃんに対して援助となるように髪飾りを提案する」という他者の援助が示されている。そこで、でこちゃんはその援助を受け入れて喜んで登園するという展開となる。一方、米国の例では、自分の選んだ服装に反対する意見に対し、自分の意思を確認して貫くことで満足するという展開となっている。北山ら（2000）は、主観的幸福感と、他者の情緒的援助・自尊心の関連について、文化的自己観により主観的幸福感を高める効果に違いがあることを報告している。『でこちゃん』には、他者からの援助を通して、満足感が得られるという日本の「文化的スクリプト」が表われているといえよう。幸福感を得るため、外的要因が結果的に促進方向（他者からの援助）に設定されたる枠組みをもつ。一方、『Ella sarah gets dressed』では、自己の内面で自尊心を高めて満足を得るというアメリカの「文化的スクリプト」が示されている。外的要因としての「他者の援助」はなく、阻止方向の外的要因の中でも自己の意思を貫く主人公が描かれている。

これら2つの物語は、児童書においてもそれぞれの社会・文化で納得して受け入れられているスクリプトに基づいて、物語が構成されていることを示すものである。子どもが自然な形で自主的にそれらの児童書を手にし、読むことで、その文化的スクリプトを自己の中に蓄積して、自己が成長発達していく。このことは、社会・文化の中に広く見られる児童書というメディアからも、子どもは影響され、自己を発達させることを示すことになるであろう。

本研究により、日米の児童書の主人公の対処行動においても、これまで文化心理学研究の中で明らかにされている対処行動の心理プロセスの特徴と同様な傾向が見られたが、今後は、こうした児童書で見られた対処行動の特徴が、子どもの実際行動とどのように対応するのか検討する必要があるだろう。

## 引用文献

- 東洋（1997）. 日本人の道德意識 柏木恵子・北山忍・東洋（編） 文化心理学：理論と実証 第4章 pp.88-108 東京大学出版会.
- 東洋（1999）. 文化心理学の方法をめぐって：媒介概念としての文化的スクリプト 財団法人発達科学研究センター紀要 発達研究, 14, 113-120.
- 東洋（2003）. 日米比較研究ノート：文化心理学と異文化間比較 財団法人発達科学研究センター

- 紀要 発達研究, **17**, 107-113.
- 東洋 (2005). スクリプト比較研究の文化心理学的位置づけ 財団法人発達科学研究センター紀要 発達研究, **19**, 1-11.
- 東洋・唐澤真弓 (1988). 道徳的判断過程のための一方法 財団法人発達科学研究センター紀要 発達研究, **4**, 103-124.
- 今井康夫 (1991). アメリカ人と日本人 創流出版
- 北山忍・唐澤真弓 (1995). 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, **35(2)**, 133-163.
- 北山忍・宮本百合 (2000). 文化心理学と洋の東西の巨視的比較：現代的意義と実証的知見 心理学評論, **43(1)**, 57-81.
- 国立社会保障・人口問題研究所 人口構造研究部 (2000). 第2回全国家庭動向調査結果の概要 Retrieved December 27, 2006, from <http://www.ipss.go.jp/syoushika>
- Kreider, R. M. & Fields, J. (2005). *Current population reports*. U.S. Department of Commerce Economics and statistics Administration U.S. Census Bureau. Retrieved December 27, 2006, from <http://www.census.gov/prod/2005pibs/p70-104.pdf>.
- 真島真理・唐澤真弓・Christine Yen・東洋(1994). 道徳的挿話における前後文脈産出：日米比較研究 財団法人発達科学研究センター紀要 発達研究, **10**, 57-66.
- 真島真理・Christine Yen・唐澤真弓・東洋(1995). 道徳的挿話における前後文脈産出：内容分析の方法と結果の概説 財団法人発達科学研究センター紀要 発達研究, **11**, 87-99.
- Morling, B., Kitayama, S. & Miyamoto, Y. (2002). Cultural practices emphasize influence in the United States and adjustment in Japan. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 311-323.
- 塘利枝子・木村敦 (2000). 小学校教科書に反映された子どもに期待される対処的対人関係：「東洋」対「西洋」の対比は妥当か 平安女学院大学研究年報, **1**, 95-109.
- 塘利枝子・真島真理・野本智子 (1998). 日英の国語教科書にみる対人的対処行動：内容分析的検討 教育心理学研究, **46(1)**, 95-105.
- 塘利枝子・出羽孝行・カンピラパーブ, S.・高向山・久米裕子・南出和余・渋谷恵 (2005). アジアの教科書に見る子ども ナカニシヤ出版.
- 渡辺雅子 (2004). 納得の構造：日米初等教育に見る思考表現のスタイル 東洋館出版社.
- Weisz, J. R., Rothbaum, F.M. Blackburn, T. C. (1984). Standing out and standing in: the psychology of control in America and Japan. *American Psychologist*, **39**, 955-969.

